

令和 6 年度 堺市障害者自立支援協議会
第 2 回 強度行動障害支援部会 議事概要

日時 令和 6 年 12 月 17 日 (火) 10:00~12:00

場所 堺市立健康福祉プラザ 大研修室

出席者 林 (施設部会)、植田 (関西大学)、平野 (北摂杉の子会)、吉川 (アプリコット堺)、
河瀬 (堺区地福)、佐門 (北区地福)、柳 (障害支援課)、川野・川崎 (障害者更生相談所)、
石橋 (北区基幹)、陳 (コスモス)、藤原 (障友会)、田中 (こころの窓)

傍聴 1 名

1. 強度行動障害支援体制整備事業の参画法人について (資料 1-1) (資料 1-2)

<各参画法人から事業を始めた思いや課題に感じていることなど>

- ・ 本人の困り事として受け止めきれず、職員の困り事を本人の課題だと思っている職員がいることが課題。施設外部からの力を借りて、今の考え方を導入したい。まずは、日中活動系から始め、職員全員で共有したい。
- ・ 現場で日々の介助と介護に追われ、その方の理解を深めることが難しい。人材不足で職員が長く続かず、利用者との信頼関係ができて退職してしまう。現場で助言を行えていない現状があり、事業で実践した内容を自法人で伝えられるようにしたい。
- ・ 重度の障害のある方も家族も安心して暮らしていけるようにという思いで立ち上がり、暮らしの場をひろげる形で事業を展開してきた。重度の方を受入れるグループホームを創設してきたが、このグループホームの形も限界を感じている。今後は、自閉スペクトラム症の方に対して、独立した生活空間を確保することをめざしている。地域に開かれるように取り組んでいきたい。
- ・ (部会長) 参画法人だけでなく個人参加にも広がりを見せている。地域に開かれた取組として、北摂杉の子会 (以下「専門的法人」という。) の力も借りながら堺市で本事業をすすめていきたい。

2. 強度行動障害支援体制整備事業の経過報告 (資料 2)

(専門的法人)

評価項目 1 標準的な支援状況表は、国が示している標準的支援を基に進めている。評価項目 2 では職員アンケートを行い、コアメンバー以外の職員にも実施している。評価項目 3 では、モデルケースを 2 名挙げ、利用者行動評価を実施。1~16 項目に 0~2 点の 32 点満点で評価。今回は事業スタート時の評価を行った。

コスモス

氷山モデルを使って説明を行った。コアメンバーの所属している事業所で現状評価となる。職員アンケートは 386 名に取っていただき素晴らしい。資料には間に合わなかったが、利用者行動評価では 23 点の方と 16 点の方が挙がっている。集中的支援が必要ではないかと思う。

職員の困り事が本当は本人が困っているという視点になり職員の意識が変わる瞬間がある。数値に変化が見えなくても、対応に変化があり、障害の特性理解が根拠となることで、統一した支援が 2 年目 3 年目に成果として出てくると経験から感じている。点数で変化がなくても本人に笑顔が増えるなど、記載事項で変化を拾うことも大切になる。

こころの窓

第 1 回訪問コンサルを実施。フォーマルな評価と言えないが、30 項目 90 分で、課題や苦手な部分の評価を実施している。6 名の方が参加。予定プログラム通りに実施予定。モデルケースの行動評価について、20 点ぐらいになると難しいケースとを感じる。

障友会

予定プログラム通りに実施予定。利用者目線で強調してコンサルを実施。標準的な支援については自粛した評価という印象。行動評価は 21 点と、かなり難しいケースと感じている。

個人参加法人

アンケート、基礎講座について資料参照。

<参画法人から感想や補足など>

- ・ 2 名のケースに共通してこだわりが強い特性がある。1 名の方は、その特性により事業所としても負担が大きく、本人の考えがわからない状況で、職員の困りごととして対応してしまっていた。コンサルで色々とお話をして、現場でも実践してみようと思った。
- ・ コアメンバーからの報告を受けている。定員に達しており、この 10 年ほど新規の受入れがない状況で、環境が整っており、なんとか日々を過ごせている。職員数も多く、利用者との相性で組み合わせを変えており大きな問題は無いが、アセスメントが疎かになっている。
今回、アセスメントを行うことで、受入れ困難だと思い込んでいたケースも、本人の強みを見つけて受け入れることができた。講義の中で、行動障害のある方が安定して地域で生活を送っている話を聞き、何も起きない方がいいと思うところから、一歩踏み出す勇気をもらった。
- ・ コロナが発生したため、オンラインにてコアメンバー以外の職員を含む 20 名が標準的支援について聞いた。第 1 回目のコンサルでは、対面でコンサルの流れについて説明を受けた後、利用者の状態を見ていただいた。障害特性に基づいたアセスメントを行い、本人はどう思っているのか、特性シートがなかなか埋められないと悩んでいる職員の姿を見て嬉しく感じた。フィードバックを大切に思っている。今後、職員の変化が楽しみである。
- ・ (委員) 標準的な支援状況の評価は誰が実施するのか。
→ (専門的法人) それぞれの事業所のコアメンバー等に評価をお願いして変化をみる。
→ (委員) 同じ方が回答する仕組みになっているといい。本人をよく見ることで意識の変化が生じる。支援者側の行動変化に繋がるノウハウが確立されている。今後、客観的に評価できる仕組みがあれば更によいと感じた。
- ・ (委員) 職員や管理職の方の変化が既に始まっていることがわかった。ようやく事業が始まったと感じた。
- ・ (部会長) 今後、コアメンバーから職員へ広がることになると思う。

3. 事業評価について (資料 3-1) (資料 3-2)

(事務局)

補足として、実践報告会は年 1 回実施の予定であったが、10 月から事業開始のため、コスモス、こころの窓についてはこの場での報告に代える予定。個人参加については、参画法人の一人である前提を踏まえた報告をお願いしたい。

- ・ (部会長) 職員アンケートについては、提出が 1 月となっており 2 月 5 日頃に集計を提出。事業評価のまとめについては、専門的法人が行う。アンケートの間隔が近いので大変だと感じている。
- ・ (専門的法人) アンケート実施時点でのコンサル回数が法人によって異なり、今年度中は均一した結果は難しい点をご理解いただく必要がある。実際に障害特性が理解できてきた時点で自己評価が一旦下がることもある。

職員自身が自分の今の力量を振り返るタイミングとなり、ここからが次のスタートになる。その流れの変化を見ていただけるのではないかと考えている。堺市の評価の仕組みと手順が素晴らしく、とても参考になる。

- ・ (委員) 個人参加は今回から参画されているのか。
 - (事務局) 個人参加の法人のうち3か所は法人として応募があったが、法人としては選定されなかった。相手方の希望のうえ、個人参加の要件を満たしていることを確認し、市として個人参加として決定した。
 - (部会長) 結果的に、法人参加だけでなく個人参加があったことでよい形になった。相互作用を期待する。
- ・ (委員) 現場で進めていく難しさもあると思う。コアメンバーから現場に下す際に正しく伝わらないことや、現場での認識を変えなくてはいけないことの難しさなど。そこで起きる現場の反応も評価をするべきだと考えている。
 - (専門的法人) コアメンバーが何を勉強しているのか、実地研修を通じてコアメンバーと現場がつながることで結果が出てくる。利用者を中心にチームを作り、学ぶ事になる。感染症による予定の遅れが予測されるが、柔軟に対応する。
 - (部会長) コンサルに入ってもらえる意義を強く感じており、今後も共有する。
- ・ (委員) 個人参加の場合、直接話を聞く機会がない中で、どのように評価するのか。変化を受け止めきれぬのかという点を意見交換したい。
 - (事務局) 個人参加の方の所属する法人ではなく、参画法人と一体での評価と考えている。必要であれば、ヒアリングさせてもらう。
 - (専門的法人) 1ケースを3年追う場合も1年で終わる場合もあり、進捗によって展開は変わってくる。
 - (部会長) 実践報告会で個人参加者にも確認。実地研修もあるので、受け身の状態にならないように振り返りを行い、深める。
- ・ (委員) 一丸として「標準的支援」を進めるためには、コアメンバーをバックアップする機能が必要。報告会の企画の充実や、コアメンバーの中でも「頑張っているよね」と言い合える機会を作ることが大事。参画法人からの報告で印象的だったのは、「悩んでいる変化が嬉しい」と話していたこと。初心を忘れてしまわないように、現在の率直な気持ちや悩んでいる姿を動画や記録で残すことで、3年後に自分たちがコンサルとして関わる際の参考になるのではないか。
 - (専門的法人) 実際、コンサルにおいて動画を取り、みんなでイメージを共有している人もいる。行動特性について考える際に活用することがある。
 - (委員) みんながひっかかるハードルについて共有できればよい。
- ・ (専門的法人) 野球では3割打者という言葉があるが、強度行動障害の支援については打率1割でプロ。視覚支援を導入したとしても、“トイレ”ひとつ取ってもエピソードが違う。“トイレ”が便器の画像ではなくトイレトーパーが本人にヒットするなど、今までの生活のエピソードと繋がったとき、はじめて活用できる。結果がわかりやすいケースの方が、支援の楽しさに気づく機会になるが、ケースに困難事例が上がっているので2~3年はかかる見通し。
 - (部会長) 個人参加の方の生の声をどのように反映させ、感じてもらえるのか記録などで残してほしい。
- ・ (委員) オール堺をめざすならば、報告会の立ち位置が大切になってくる。支援者の戸惑いを共有する機会にもなる。評価項目から職員の質的なところを追うのかと思うが、2.3年目の評価の内容についてお聞きしたい。
 - (事務局) 数字の変化だけでなく、数字の裏付けや背景を踏まえた上で、評価のフィードバックをしてもらう。3年後に人材育成や視野を広げることを目的としている。コンサルで学んだ専門的な知見を地域に返してもらうための事業評価の視点と考えている。
- ・ (部会長) コアメンバーが現場と一緒に悩みながら変わることがポイントになる。

- ・ (委員) 現場の苦労もあると思うが、一丸となって取り組もうとしている姿勢が、利用者評価からもわかる。人が変われば環境が変わる。質を変える事業であると感じた。
- ・ (委員) 日々の業務で忙しい中、事業に参画いただいた。職員がわからない事に気づき、次に進む過程が大切だと思う。次に逆の立場になることを踏まえて、今の積み重ねを残すことが大切だと思った。
- ・ (委員) コアメンバーと現場の到達点の一致が大切だと考えている。利用者に変化が見られた際に、支援者が特性理解の中で関わったプロセスを理解することが大切。報告会を楽しみにしている。

<コアメンバーの集まりについて>

- ・ コアメンバーの中の困りごとを相談したいことがあると思う。市に企画していただくか、独自で実施するか、今のところ、ミニ報告会を他法人と一緒に考えている。顔の見える関係も財産になると感じている。
→あまり敷居が高くない方がよとの意見があり、3法人で企画することとなった。事務局も可能であれば見学。
- ・ オープンの報告会の前に打合せがある。法人それぞれで企画を予定。
- ・ 大阪府では、勉強会+事例検討を報告会で行っている。2回のうち1回は、ケースをシャッフルしてアウトプットする場として開催している。根拠のある支援の報告の場であり、交流の場にもなっている。コンサルがくることがプレッシャーになっていると思うので、インフォーマルな場でご苦労を言い合える会があってもいいと思う。
- ・ 今後、堺市で実践を広げることをチームとして行うために、交流もできればと思う。

4. その他

- ・ 令和7年2月3日(月)に、堺市産業振興センターで更生相談所との共催研修を予定している。利用者の方をモデルにアセスメントを行い、PDCAサイクルを学ぶ機会を企画している。対象者は障害特性について一定学んでいる方で、これまでの連続勉強会受講生及び参画法人の事業所の方々と考えている。チラシが完成すれば先駆けて第1回のシリーズをYouTubeで限定配信する予定。

もう1点、基幹相談支援センターの強度行動障害プロジェクトチームでは、更生相談所の職員と一緒にNPO法人ぴーす『ぼっしえ』を見学している。保護者の手作りの視覚支援グッズを実際に見ることができた。その中で、見通しを伝えることも大事だが、本人の発信を受け止めて、伝えたいという気持ちを育み、その経験を積み重ねて発展させることの大切さを再確認できた。強行WTでも、児童期からの予防的な観点について議論されてきた。標準的支援が当たり前の社会に広げられるように、児童の方にも参加いただく機会があればよい。

- ・ 大阪手をつなぐ育成会の研修に参加し、のぞみの園理事長の講演を聞いた。その中でも、児童との連携についての内容があり、児童・教育との連携について考える機会となった。強行WTでも、『あい・すてーしょん』のような機能について話題になったと思うが、標準的支援に関する内容を『あい・サポーター養成研修』でも実施してもらい、意見交換等ができる場があればよい。

この部会は、事業の推進・評価・啓発という目的があると思うが、支援だけでなく、人の成長や人との関係性がどう変わるのか、それを受け止める社会がどう変わるのか、非常に大事なポイントだと感じている。

◎第3回強度行動障害支援部会 開催日程については、令和7年2月中旬頃を予定。